

英米新聞報道におけるトランス女性スポーツ選手の悪魔化  
——全米大学選手権で優勝したリア・トーマス選手をめぐる  
報道の批判的言説分析——

溝 上 由 紀

# 英米新聞報道におけるトランス女性スポーツ選手の悪魔化 ——全米大学選手権で優勝したリア・トーマス選手をめぐる 報道の批判的言説分析——

溝 上 由 紀

## 1. はじめに

2022年3月17日、NCAA（全米大学体育協会）の最上位レベル Division1の全米大学選手権の競泳女子500ヤード自由形で、ペンシルベニア大学（当時）のトランスジェンダー選手リア・トーマス（Lia Thomas）が、4分33秒24のタイムで優勝した。トーマスが、トランスジェンダーであることをオープンにしてNCAA DIで優勝した、全競技の中で最初の選手だったことから、この結果をめぐる激しい議論が巻き起こった。

近年は、LGBTQ という言葉が一般に認識されるようになり、性的マイノリティを取り巻く差別や偏見に対しての問題意識は広まりつつあるように思われる。性的志向や性自認を理由とした差別を禁止する法律が整備されたり、同性婚が認められる国も増えた。また2015年の国連サミットで採択された、2030年までにより良い世界を目指すための国際的な目標であるSDGs（持続可能な開発目標）の取り組みの影響もあり、多様性や包摂という理念の理解は着実に進みつつある。

しかしながら、LGBTQ の中でも、T（トランスジェンダー）、殊に男性から女性に転換したトランス女性への偏見は、スポーツの文脈においては今も根強いように思われる。トランスジェンダー（以後「トランス」）とは、「性別越境者」すなわち、身体の性と性自認が一致しないため、出生時に与えられた性とは別の性で生きることを自分の意志で決定した人々のことである。しばしば、「性同一性障害（GID）」や「性分化疾患（DSD）」と混同されることがあるが、これらは疾患名であり、自分の意志で個性として自認する性を選んだトランスと同一の概念ではない（阿部、2023）。また、トランスを自認することは、性別適合手術の有無には関わらない。全米大学選手権（以後「選手権」）でのトーマスの優勝は、日本のメディアでの注目は限定的であった印象であるが、英語メディアでは多く報道され、そこではトランス女性として優勝したトーマスを、「多様性」や「包摂」の観点から尊重し称える論調よりも、「生物学・医学」、「公平性」、「犯罪可能性」、「反＝性自認尊重」などの観点から非難し貶める論調が大勢を占めていた。そしてその流れは、後述するように、その後のトランス女性のエリートスポーツからの締め出しにつながったように思われる。

NCAA 選手権の数か月後の2022年6月19日、FINA<sup>1</sup>（国際水泳連盟）は、トランス女性選手

が世界選手権やオリンピック等のエリート大会の女子競技に参加することを制限する新指針を採択した。新指針は、男性思春期の第2段階より先を全く経験していない、もしくは12歳未満であることを、血清中のテストステロン（男性ホルモン）値が1リットル当たり2.5ナノモル以下であるという証拠の提出をもって立証できる場合に限りトランス女性も大会に出場できるとし<sup>2</sup>、これはトーマスにとっては事実上その後のエリート女子競技会への出場禁止の宣告となった。WAは2023年のワールドカップから、男女のカテゴリーとは別に、トランス選手を想定した「オープンカテゴリー」を新設したが、エントリーした選手はいなかったとされる。トーマスは、トランス女性を女子カテゴリーから締め出す指針の撤回をCAS（スポーツ仲裁裁判所）に訴えたが、2024年6月12日、訴えは棄却され、これにより同年夏のパリオリンピックへの出場は叶わなかった。

筆者はスポーツの専門家ではなく、トーマスを選手権に出場させるべきであるとかないとかの判断をできる立場にはないので、本稿ではそのことに立ち入るつもりはない。本稿で筆者が行うことは、トランス女性選手は、メディア報道において不当に貶められ、読者にトランスへの悪い印象を持たせ、トランス差別を助長する可能性があるような表象をされている、すなわち悪魔化されているのではないかという問題意識を持ちながら、選手権における主要英語メディアのトーマス関連報道をCDA<sup>3</sup>（批判的言説分析）の姿勢で分析することである。メディアという権力がニュースを伝えるとき、使用語彙や叙述方法、叙述の立場、何に焦点を当てるかなどの選択がなされ、生み出された言説にはある種の価値観やイデオロギーが内包される。その言説と受け手との相互作用により、社会的現実、あるいは常識が生産され、再生産され、維持されていく。そうだとしたら、差別や社会的不平等の再生産や維持には、言説の力が大きく関わっていることになる。CDAは何か1つの確立した分析方法を指すものではなく、上記のような問題意識から、言語を社会的実践とみなし、言語使用に焦点を当てながら社会問題や現象に関する言説を批判的に検討する学問的姿勢のことである<sup>4</sup>。本稿においては、新聞記事という主流の言説に内包された価値観やイデオロギーを抽出し、トランス女性選手が権力のある言説により「（解決すべき）問題」や「（女性に対する）脅威」として表象され、排除や差別の語りにさらされ不利益を被っている事象を批判的に分析していく。

## 2. 方法

### 2.1. データ収集

2024年1月25日に、Proquest社の外国新聞データベースGlobal Newsstreamを使用してデータ収集をした。米国はトーマスの出身国で選手権の開催地であること、英国はトランスに対する差別が根強いとされる国<sup>5</sup>であることから、両国の論調は本稿の考察に値すると思われるため、検討対象は検索可能な米国と英国の主要新聞とした。選手権が行われた日とその前後の2022年3月1日から31日を検索対象期間に設定し、Lia Thomasをキーワードにニュース記事を検索し

た。検出された記事のうち、名前と記録のみを短く報じた記事や、版が異なるが内容が重複する記事を除いた48本を本稿の検討対象とした。

考察対象となった記事は、米国の *USA Today* (以後 Today)、*The Washington Post* (以後 WP)、*The Wall Street Journal* (以後 WSJ)、*The New York Times* (以後 NYT)、英国の *The Daily Telegraph* (以後 DT)、*The Guardian* (以後 Guardian)、*The Daily Mail* (以後 DM) のものであった。Today、WSJ、NYT は米国の3大新聞と言われるものである。DT は英国の3大高級紙の1つであり論調は保守寄り、Guardian も同様に論調は左派寄り、DM は中級紙で発行部数は上記高級紙よりもはるかに多く、論調は保守寄りとされる。米国の記事は18件、英国の記事は30件であり、各新聞の記事数は、米国の Today が9件、WP が6件、WSJ が2件、NYT が1件で、英国の DT が14件、DM が14件、Guardian が2件であり、英国の記事数が多く、特に保守系メディアの記事数が多い。

## 2.2. データ詳細

各記事を読み、トーマスの選手権参加や勝利について賛成・擁護している記事、反対・非難している記事、両論併記・中立あるいは賛否不明の記事に分けた。また、各記事において、トーマスの選手権優勝が中心的主題か周辺的主題（他の話題の中でトーマスに言及するもの）かも確認した。結果は、賛成・擁護が4件（うち中心的主題は3件）、反対・非難が30件（うち中心的主題は26件）、両論併記・中立・不明が14件（うち中心的主題は7件）であり、トーマスの選手権参加や勝利を中心的主題とし、それについて反対・非難する論調の記事が圧倒的に多いことがわかる。

|    | 論調       | 賛成・擁護 |     | 反対・非難 |     | 両論併記・中立・不明 |     |
|----|----------|-------|-----|-------|-----|------------|-----|
|    | 主題       | 中心的   | 周辺の | 中心的   | 周辺の | 中心的        | 周辺の |
| 米紙 | Today    | 0     | 0   | 6     | 0   | 0          | 3   |
|    | WP       | 3     | 1   | 1     | 0   | 0          | 1   |
|    | WSJ      | 0     | 0   | 0     | 0   | 1          | 1   |
|    | NYT      | 0     | 0   | 1     | 0   | 0          | 0   |
|    | 計        | 3     | 1   | 8     | 0   | 1          | 5   |
| 英紙 | DT       | 0     | 0   | 7     | 3   | 4          | 0   |
|    | DM       | 0     | 0   | 11    | 0   | 2          | 1   |
|    | Guardian | 0     | 0   | 0     | 1   | 0          | 1   |
|    | 計        | 0     | 0   | 18    | 4   | 6          | 2   |
| 総計 |          | 3     | 1   | 26    | 4   | 7          | 7   |

分類結果を見ると、トランスに対する攻撃が激しいとされる英国において、保守系メディアに

よりトランス女性が悪魔化される状況は想像に難くはない。一方でトーマスの出身国である米国の WP 以外の主要メディアも、英国のリベラル系のメディアもトーマスの選手権参加について賛成・擁護記事を出していないことは、トランス女性のスポーツ参加の議論の複雑さを物語るのだろう。以下の章において、主にトーマスの選手権参加を中心的テーマとした反対・非難記事の言説におけるトーマスの悪魔化について分析していく。

### 3. トーマスが選手権出場に至るまでの概要

2022年3月16日から始まる選手権の直前に、米国のスポーツ月刊誌 *Sports Illustrated* がトーマスの紹介記事を掲載した。まずは同誌記事を元にトーマスが注目を集めるに至った背景を確認しておきたい。

トーマスは、2022年3月当時、ペンシルベニア大学（以後「ペン大」）の経済学専攻の最終学年で22歳である。高校時代からエリート水泳選手で、2018年2月の大学1年時には、アイビーリーグ選手権で男子500ヤード、1000ヤード、1650ヤードの自由形で8位に入賞した。その翌2018-19シーズンには、上記の3つのレースで2位に入賞し、NCAA 優勝やオリンピックへの出場という目標に近づいていた。

一方で、高校時代から性別に違和感があり、大学2年時にはそれが強くなったので、その年のシーズン終了後の2019年5月から HRT（ホルモン補充療法）を始め、女性へと移行し始めた。そして2020年元旦から「リア」の名を使い始めた。当時の NCAA 規定では、性別カテゴリーを変えて試合に出場するには1年間の HRT が必要だったため、3年時は男子として競技に出場した。大学で計3シーズンを男子として競技した後、4年時は休学した。翌2021-22シーズンに女子として競技に出場し始め、数々の大会で200ヤードや500ヤードの自由形などで大学女子のトップレベルの記録を出した。そして2022年3月に行われる選手権でもそれらの競技で優勝候補であるとして紹介されている。

ペン大水泳チームの一部メンバーの保護者が、NCAA とアイビーリーグと大学に手紙を送り、トーマスの女子選手としての大会出場について抗議したり、大学のチームメイト16人がアイビーリーグの大会からのトーマスの締め出しを求める匿名の手紙をアイビーリーグ役員に送るなど、身近にいる全員がトーマスの支持者だったわけではないようだが、ペン大とアイビーリーグはトーマスを支援し、競技への参加を認めてきた。しかし USA Swimming（米国水泳連盟）は、選手権に先立つ2月1日に、トランス女性が女子選手として出場するためには、以前のオリンピック出場基準値の半量である、1リットル当たり5ナノモル以下のテストステロン値を大会出場申請前の36か月間連続で登録しなければならないとする新基準を発表した。トーマスが3月の選手権までに HRT を受ける期間は34か月であり新基準に足りないが、NCAA は直前のルール変更は不公平で有害な影響があるとして新基準の適用決定を遅らせ、トーマスに競技出場を許可した。以上が同誌による概要である。

そして本稿冒頭で述べたように、大学生活最後の大会となった選手権で、トーマスは500ヤード自由形で優勝した。一方、同じく出場した100ヤードでは8位、200ヤードでは5位であった。以下では上記概要を前提に新聞記事を分析・考察していく。なお、記事には署名のないものもあり、署名があるものも筆者の属性についてデータに記載がなく、新聞社所属の記者によるものなのか、外部専門家等の投稿なのか把握できない。よって本稿では新聞名により記事に言及する。記事の日本語訳は筆者によるものであり、誤訳などの責任は筆者にある。

## 4. 分析と考察

### 4.1. トーマスの選手権参加や勝利について賛成・擁護する言説（賛成・擁護言説）

反対・非難記事の分析に先立ち、数が少なかった賛成・擁護言説について簡潔に紹介しておきたい。この言説では主に、1、科学の不確定性、2、反トランス嫌悪の2種類に集約できる論拠に基づいて、トーマスの選手権参加や勝利について賛成したり、擁護したりしていた。以下に例を挙げる。引用した新聞名のあとに記載した数字は、記事の日付であるが、全て2022年3月の記事なので掲載日のみ記した。

まず1つ目の科学の不確定性についてであるが、例えばWP (17) は、トランス女性がホルモン療法でテストステロン値を下げてでも体格や強さの面で何らかの生物学的優位性を持つかどうかについて、「科学は未解決のまま (the science remains unsettled)」だと指摘する。その根拠として、ホルモン療法が与えるデメリットを指摘する医学物理学者の Joanna Harper による、「ホルモン療法で筋肉が減った後は、骨格が大きくなると有酸素運動が難しくなる。([A] larger skeleton is actually harder to aerobically push after the muscle loss of hormone therapy.)」という研究結果や、NCAA スポーツ医学ディレクターの LaGwyn Durden の、「科学・医学界はテストステロンの閾値について実際には合意に達していません。 (“The science/medical community really hasn’t reached a consensus on testosterone threshold.”)」というコメントが引用される。実際、「トランスジェンダーの人々は2004年からオリンピックに出場を許可されてきたが、まだメダルを取っていないし、ましてや女性を壊滅させてはいない。(Transgender people have been allowed to compete in the Olympics since 2004 and have yet to medal, much less blot out women.)」という事実も付け加える。トランスが有利であるかどうかの科学的な解答は出ておらず、大会主催者が出場を認めているという状況の中、同記事は、「私たち自身の締めつけるような恐れや不確実性からトランス選手をエリート大会から排除するのは、有害的に間違いである。([T]o exclude trans athletes from elite competition, out of our own constricting fears and uncertainty, is wrong, harmfully so.)」と述べ、トーマスの選手権参加を支持している。

そして2つ目の反トランス嫌悪については、例えばWP (21) は、トーマスの友人でアドバイザーの Schuyler Bailar のコメント、「人々は彼女を女性のスポーツを破壊しようとする悪質な人間として描いています。彼女は大好きなスポーツで全力を尽くしているだけの女性です。

そして実在の人間です。（“They are painting her as some nefarious human that is trying to destroy women’s sport. She is just a woman who is trying her best in a sport that she loves. And she is a real person.”）や、トーマスが優勝した500ヤード自由形のレースで3位となったエリカ・サリバン選手のコメント、「ありのままの彼女自身であるという理由によって（トーマスは）不当に標的にされてきました。（“[Thomas] has been unfairly targeted for . . . being who she is.”）」を引用しながら、トーマスが世論やメディアの言説により好意的に包摂されず不当に悪魔化されている事象を批判する。また、WP（2）は、「トーマスさんに対する争いは「生物学的な優位性」でも「公平性」の問題でもない。純粹でシンプルなトランス嫌悪であるようだ。（[T]he kerfuffle over Ms. Thomas isn’t about “biological advantage,” nor is it about “fairness.” It seems to be about transphobia, pure and simple.）」と述べる。ここに見られるのは、トーマスを悪く言ったり、大会参加に反対することはトランス嫌悪に当たる良くない行為であり、生身の人間であるトーマスの人権の尊重や包摂の観点から、選手権参加は反対されるべきではないという主張である。

#### 4.2. トーマスの選手権参加や勝利について反対・非難する言説（反対・非難言説）

トーマスが選手権の500ヤード自由形で優勝した瞬間の描写をいくつか見てみよう。

トーマスの長い指がプールの端に触れたとき、満員の群衆はほとんど黙っていた。（When Thomas’s long fingers touched the end of the pool, the packed crowd was almost silent.）（DT, 23a）

誰もが彼女（＝トーマス）の勝利にわくわくしたわけではなかった。彼女が優勝した後、ほとんど歓声は上がらなかった。（[N]ot everyone was thrilled about her victory. There were barely any cheers after she won.）（Today, 18）

（勝った直後）ハグする人はおらず、満面の笑みを浮かべる人もいなかった。（中略）。優勝者として彼女の名前がアナウンスされたとき、小さな水泳場は静かな、儀礼的な拍手で満たされた。（There was no one to hug, no big smiles to flash. . . When her name was announced as the race’s winner, the small swim arena was filled with quiet, polite applause.）（WP, 18）

トーマスのアトランタでの500ヤード自由形での優勝は、彼女が東京オリンピックのメダリストを3位に退けた後、複雑な反応を受け、ブーイングする観客もいた。対照的に、2位のエマ・ワイアントは群衆から大きな歓声を受け、ソーシャルメディアではヴァージニア大学のその水泳選手を「真の勝者」だと宣言する者もいた。（Her victory in the 500-yard freestyle in Atlanta received a mixed reaction with some spectators booing after she beat a Tokyo

Olympic medallist into third. By contrast, second-placed Emma Weyant received loud cheers from the crowd, with some on social media declaring the University of Virginia swimmer the “real winner”). (DT, 19)

上記の描写は全て、トーマスの選手権参加や勝利について反対・非難するいくつかの記事の冒頭に近いところに見られたものである。トーマスが勝った瞬間の会場は、通常ありそうな優勝者を称える温かい雰囲気とは無縁で、観客は「沈黙」して「歓声もなく」、「儀礼的な」拍手を送ったと語られる。ブーイングも起こり、反応は「賛否が入り混じった複雑な」ものだったとされ、これらの描写は、会場でのトーマスを、歓迎されていない孤立した他者として浮かび上がらせる。それは2位の選手に対して「大声の歓声」や「真の勝者」の名が与えられたとする描写とは全く対照的である。これらの記事は、冒頭に近い部分で、会場の雰囲気をトーマスにとってネガティブな形で紹介しながら、トーマスの選手権出場や優勝は問題であり、反対・非難することが正義であるとの印象を持つように読者を誘導しているかのようだ。

反対・非難言説において、反対・非難の論拠として語られたものは、1、生物学的優位性、2、不公平性、3、犯罪可能性、4、反=性自認尊重の4種類に集約が可能であると考えられた。各言説ではこれらの論拠を1つあるいは複数挙げながら、その価値判断に基づいてトーマスの選手権参加や勝利について反対したり、非難したりしていた。各種類の言説を例示し、そこでどのような形でトーマスが悪魔化されているかについて分析と考察を加えていく。

#### 4.2.1. 「トランス女性生物学的優位性がある」言説

1つ目は、生物学や医学など科学の名の下にトーマスの体格やホルモン等の女性選手に対する優位性を主張する言説である（以後「生物学的優位性言説」）。この言説には「トランス女性は生物学的男性である」とするイデオロギーが内包され、トーマスは生まれつきの女性（以後「シス女性」）の選手たちの活躍の場を奪う男性で問題であるという論理で悪魔化される。トランス女性は、「男性の思春期を経験し、シス女性に対して甚大な身体的優位性を持つ人 (someone who has gone through male puberty and possesses huge physical advantages over the biological women) (DM, 26a)」という前提でトーマスの外面的・内面的な男性的要素が描写され、読者がトーマスやトランス女性全般に対する嫌悪や悪印象を持つように誘導しているように思われる。

外面的要素の言及は例えば以下のような形で行われる。

リア・トーマスは、女性を自認しているかもしれないが、男性の性器をそのまま残していて、その肩、筋肉、骨の長さは明らかに男性のものだ。(Lia Thomas may identify as a woman, despite retaining their male genitalia intact, but those shoulders, those muscles and that length of bone clearly belong to a man.) (DM, 25)

DM (25) では、女性を自認するトーマスの体格の「女性らしくなさ」に言及される。「男性の性器をそのまま残して」という部分は、トーマスの身体の男性的要素を、女性としては異常なものとして発見して強調しようとする記者の意図が見られる。また同記事で、女性として選手権に参加するための条件として「手術は必要なかった (with no surgery of any kind required)」ことや、「トーマスは、えー、男性器が半分立った状態で女性の更衣室を裸で歩き回る。(Thomas walks naked around the female changing rooms at, er, half-mast.)」などの情報も加えられ、HRT はしているが、性別適合手術はしていないとされるトーマスの身体や行動の「男性的要素」を揶揄したり、シス女性にとって問題であり脅威であると感じさせるかのような描写を行う。

トーマスの体格に関する描写の他の例もある。優勝者トーマスが表彰台の一番左端、2位の選手が中央、3位の選手が右端に立つ表彰式の画像が新聞やオンラインニュース上で掲載された。トーマスは男性としても比較的身長が高いことから、画像ではトーマスと他の選手との身長差が目に見える形となり、それは悪魔化のための格好の攻撃材料とされた。

6 フィート 1 インチ (約185cm) のスイマーが優勝者の表彰台で競争相手を小さく見せている画像が世界を飛び交い、熱狂的な議論に火をつけた。(Images of the 6ft 1in swimmer dwarfing her competitors on the winner's podium beamed around the world, igniting passionate debate.) (DM, 26a)

ここでは童話の小人 (dwarf) を想起させる語を動詞として用いて、トーマスの身体が他の女性選手たちを「小さく見せる (dwarf)」と描写され、背が高くないシス女性選手にとってトーマスが大きく怖い存在であると強調しているようだ。「熱狂的な議論」とはトーマスの出場が是か非かという議論であると考えられ、「非」の側に立つ記者は、このように体格に言及することで、シス女性のスポーツにおける活躍の場を奪う生物学的男性としてトーマスの姿を浮き彫りにしようとしていると考えられる。

また別の記事は、表彰台の左端にトーマスが一人で立ち、2位の場所は空いていて、3位の場所にレースで2、3、4位だった3人のシス女性選手たちが一緒に立っている画像に言及する。

あなたの顔をしかめさせる、表彰台の勝者たちの写真が1枚ある。実際、きわめて不快だ。左側の1位の位置に立つトーマスは、ありえないほど長い脚、長い胴体、平らな胸(中略)。右端の(2番の表彰台はこの時空いていた)、3位の台でふてくされて笑っているのは、ワイアントとサリバンと4位のブルック・フォードだ。3人の上位入賞者は、リア・トーマスとあまりにも違って見えるので、他の種に属したほうがいい。3人のガゼル

対リアのキリン。あるいは少なくとも別の性別だ。(There is one photograph of the winners on the podium that makes you wince. Actually, it's excruciating. On the left, in the Number 1 position stands Thomas, impossibly long of leg, lengthy of torso, flattish of chest. . . To the far right (the Number 2 podium was vacant at this point), and smiling defiantly in the Number 3 slot were Weyant, Sullivan and Brooke Forde, who came fourth. The three runners-up look so different from Lia Thomas that they may as well belong to a different species, a trio of gazelles to Lia's giraffe. Or, at least, a different sex . . . ) (DT, 23a)

その画像は「顔をしかめさせる、ひるませる」もので、「不快な」ものだとし強い語を使ってトーマスの優勝が断罪される。2、3、4位の3人の選手は、「ふてくされて、反抗的に」笑っていると描写されるが、実際に結果に対して不満を持っていたかは不明である。少なくとも3、4位の両選手は、「トーマスとトランス選手への支持を過去に公に表明した (have both publicly expressed their support for Lia Thomas and trans athletes in the past) (DM, 26a)」と別の記事で報道されているからだ。足、胴体、胸などトーマスの身体の男性的特徴に言及され、トーマスと他の選手たちとの体格の違いは、体高1メートル程度のカゼルと5メートルにも及ぶキリンに例えられる。生物学的優位性言説は、トーマスの体格の男性的要素に執拗に言及しながら、トランス女性であるトーマスは生物学的男性であり、シス女性に対して優位性があると主張する。そして小さな弱いシス女性たちの活躍の場を理不尽に奪う大きな強い男性は、問題であり脅威であるという論理で悪魔化する。

実際にはトーマスの選手権での優勝記録は過去最高ではなく、つまりそれは過去により速い記録を出したシス女性選手がいたということを意味する。またWP (17) の指摘によると、過去にはトーマスより背が高い約188センチのシス女性選手 Missy Franklin がいたことも分かっている。仮にトーマスが小柄で華奢なトランス女性だったらどのような報道がなされたのだろうかと考えると興味深い。

さらに生物学的優位性言説は、外面だけでなく、トランス女性が持ちうると思われる男性ホルモンの働きなどの内面的な優位性についても言及する。

専門家によると、ホルモン補充療法は、心血管機能の増加、筋肉量の増加、腱の力学的強度の増加、骨密度の増加など、テストステロンによって引き起こされる思春期に身体が得る可能性がある競争上の優位性を相殺できない可能性があるという。スポーツ界のトランス女性は、長い腕を持ち、強く背が高い傾向がある。(Experts say hormone replacement therapy may not counteract the competitive advantages a body might gain during testosterone driven puberty, such as increased cardiovascular capacity, greater muscle mass, higher tendon mechanical strength and denser bones. Trans women in sport tend to be stronger and taller, with longer arms.)

(DT, 18)

テストステロンを減らした後でも、男女の生物学的差異は大部分は持続し、この生物学はパフォーマンスに大きな影響を及ぼす。これは、テストステロンが体内で一度作用すると、元に戻せないためだ。(男性ホルモンは)確かに減ったがなくなっているわけではない。もし生物学的な違いが続くなら、それは男性由来のパフォーマンス上の優位性がトランス女性に引き継がれることを強く示唆する。(Biological differences between males and females largely persist, even after a period of testosterone reduction, and this biology has significant implications for performance. That is because once testosterone has had its effects in the body, it cannot be reversed. Reduced, certainly. Removed? No. If biological differences persist, it strongly suggests male-derived performance advantages will be carried forward by trans women.) (DT, 23b)

上記の言説は、トランス女性の優位性は科学的に証明された事実であり、トーマスの勝利はその男性ホルモンの働きのみによるものだと言いたいかのようである。しかし前節で言及したように、HRTによるデメリットを指摘する研究もあり、現在、真実はまだ科学的に解明されていない段階にある。その上、トーマスの記録がホルモンの働きのみによると断定することは、彼女の長年の訓練や努力をなかったものにしてしまうこととなる。

トランス選手のスポーツ大会参加について、歴史的にスポーツ界の対応には試行錯誤があったが、近年は男性のパフォーマンスが女性のそれを上回るのはテストステロンの働きによるものであるとの「科学的」判断のもと、多くの競技でその数値を一定以下に下げることによってトランス女性も女性として大会に参加できるようにされてきた<sup>6</sup>。トランス女性の大会出場規定は各スポーツ団体によって取り決められてきたが、2022年選手権においては、NCAAが、1年間以上テストステロン抑制治療を受けることと条件を定め、トーマスの大会参加を認めた。スポーツ界が科学の名の下に女性のあるべき数値の範囲を定義すること、そしてその数値が当然のように男性よりも低いとの前提で定義されることは、結果的にスポーツにおいて女性を劣位にとどめておくことにつながってしまう可能性があることは指摘しておくべきであろうが、トーマスは主催者の条件を遵守した上で大会に参加し優勝したのであり、いかなる不正も違反もしていない。この意味で、トーマスはあくまでも男性としてではなく女性として出場したのであり、その記録は称賛されるべきであろうし、「トランス女性は生物学的男性である」、「スポーツにおいてトランス女性はシス女性に対して生物学的優位性を持つ」と断定するイデオロギーを内包した、スポーツにおける女性の活躍の場を奪う悪い男性としてトーマスを語る言説は公正なものとは言えないだろう。

#### 4.2.2. 「トランス女性の参加は不公平である」言説

2つ目は、トランス女性の生物学的優位性を踏まえ、シス女性とトーマスを同じ舞台で競わせることは不公平であると主張する言説である（以後「不公平性言説」）。

（リア・トーマスは）ウィルと呼ばれる男性としてペンシルベニア大学チームで戦ったが特別に立派な成績ではなかった。彼女は男子の554位から女子カテゴリーの1位になった。（中略）。なぜ我々はこの議論に2つの側があるふりをするを強いられるのか。2人の素晴らしい選手、エマ・ワイアントとエリカ・サリバンがリア・トーマスと公平に戦ったなどありえない。（[A]s a man called Will, she competed for the University of Pennsylvania with no particular distinction. She went from 554th as a man to 1st in the women's category. . . Why are we even obliged to pretend that there are two sides to this argument? There is no way that Emma Weyant or Erica Sullivan, two incredible athletes, were in a fair fight with Lia Thomas.）（DT, 23a）

上記の記事は、トーマスの過去の男性としての名前に言及しているが、これはデッドネーミングと呼ばれる差別行為である。「議論の2つの側」とは、トランス女性を男性と見る側と女性と見る側のことであろう。記者を含む「我々」世間の人々は、トーマスが女性であるとする意見を持つ側の人々がいる「ふりをさせられている」が、記者はトランス女性は男性であると考える側において、実はこの議論にはそう考える人しかいないと見ていることが読み取れる。男子のときは「特に目立つ戦績ではなかった」との記述は、読者をミスリードする意図が明らかだ。前章で紹介したように、トーマスは大学1、2年時、男子大学水泳選手として非常に強く、オリンピック出場にも近いとされていた。男子としての戦績が落ちてきたのはHRT開始の影響だと推測できる。女子として出場し始めたために弱い選手から急に強い選手になったかのような記述は、トーマスをシス女性の活躍の場を奪う悪い男性として描くためのレトリックである。

トランス女性当事者であるケイトリン・ジェンナーのコメントを引用した記事もある。ジェンナーは、ブルース・ジェンナーの名で1976年モントリオールオリンピックの十種競技で金メダルを獲得した元男性アスリートであるが、2015年に65歳で性転換を行い、トランス女性となった。DM（5）でジェンナーは、「元オリンピックアンとして、トランス女性がスポーツで生物学的女性と競うことが許されることにとりわけ絶望している。（As a former Olympian, she particularly despairs of trans women being allowed to compete alongside biological females in sport.）」と紹介され、以下のような発言をする。

「彼女（＝トーマス）は生物学的少年として育ったので、女性スポーツで戦うことは公平ではありません。（中略）。このような状況で他の女の子を負かしてなぜ幸せになれるのか分かりません。人間としての責任感を持たなければなりません。（“[S]he grew up as

a biological boy and I don't think it's fair that she's competing in women's sports. . . I don't see how you can be happy beating other girls under these circumstances. You have to have a sense of personal responsibility.”)」

「このような状況」とは、生物学的男性が女性と戦う状況であり、トーマスが勝つことは、不公平で人間としての「責任感」がない行為、つまり、不正行為であると主張されている。この記事は、元アスリートで、トランス当事者である有名人に、トーマスを擁護するコメントではなくこのような批判的コメントを語らせることで、トーマスにより悪い印象を持たせ、より孤立させるような意図があることが伺える。

スポーツは公平性を求める。仲間が仲間と戦った。男性に生まれた人と女性に生まれた人は同じではない。(中略)。トーマスを許可しないことはトランスロビーには不公平に思えるかもしれないが、それは単に少数ではなく多数にとっての公平の裏返しだ。(Sport strives for fairness. Peer pitted against peer. Someone born male is not the same as someone born female. . . Disallowing Thomas might strike the trans lobby as unfair, but that's just the flip side of fairness for the many, not the few.) (DT, 18)

上記は、マイノリティであるトランス女性の側に立った公平ではなく、マジョリティであるシス女性の側に立った公平を求めることこそ正義であると主張している。テストステロン値を一定以下に下げるという、トランス女性の包摂と競技の公平性が担保できそうな落としどころを大会主催者が決め、トーマスは当時の規定を守り正当に競技したのであるが、不公平性言説は、トランス女性とスポーツにおいては包摂と公平性は両立し得ず、スポーツ組織は、「トランス選手の権利を何よりも優先するか、女性として生まれた人々がトランスの包摂により不公平に不利な立場に置かれることを認めるかのどちらか (either put the rights of trans players before all else or accept that those born as women are being unfairly disadvantaged by their inclusion) (DM, 26b)」を選ぶしかないとする。NCAA がトーマスの出場を認めたことは、「女性の権利が、女性であると決めた男性の権利の下位に突然に置かれたこと (women's rights were suddenly deemed secondary to those of men who had decided they were women) (DT, 23a)」で、「トランス女性を女性スポーツの最高レベルで戦わせることで、私たちの祖母たちや母たちがそのために必死で戦ってきた平等を後退させた (by allowing trans women to compete at the highest levels of female sport, we set back the equality for which our grandmothers and mothers fought so hard) (DT, 23a)」のであり、「何年もの間苦労してランクを上げてきた女性たちにとって、全く不公平 (that's completely unfair to the women who spent years of hard toil working their way through the ranks . . .) (DM, 26b)」、すなわち女性差別だという論理展開がなされる。この言説は、あくまでもシス

女性中心の視点から、スポーツにおけるシス女性をトランス女性の犠牲者として描写する。ここでは、シス女性と同じように何年も努力を重ねてきたトランス女性の苦労は不可視にされる。つまり不公平性言説には、あくまでもトランス女性は生物学的男性であるということが前提にされた上で、「トランス女性の参加はシス女性にとって不公平である」、「トランス女性がシス女性の出場やメダル獲得の機会や権利を奪うのは女性差別である」、「公平性は包摂よりも重要である」とするイデオロギーが内包されていると考えられる。

包摂といえばマイノリティを排除しないために平等に参加の機会を提供することであり、社会的に弱い立場の人を支援しその人権を守るとするのがその理念と言えるだろう。ところでマイノリティに対する一般のイメージは、不可視にされがちな少数者・弱者というものではないだろうか。そして、マイノリティが包摂された場で勝利し活躍し目立つということは、おそらくは「包摂されたマイノリティの物語」に人々が期待するイメージを裏切る現象なのではないだろうか。マイノリティが弱者で目立たない存在でいる限り、つまりスポーツの文脈で言えば、強者・勝者にならない限りは人々は寛容に彼らを包摂するが、強者・勝者になった途端に包摂は不公平だとみなし始めるという傾向がありそうだとすることは指摘しておくべきだろう。その例を2つ挙げると、1つは片足が義足のドイツの走り幅跳び選手マルクス・レームについてである。「義足なのに大したものだ」、「よく頑張っている」と記録が低い頃には彼を称賛していた周囲の声は、彼が2014年のドイツ選手権で健常者を破って優勝した途端に、「義足の選手が勝てるはずがない」、「何かがおかしい」というものになり始めたという（朝日新聞デジタル、2016）。義足のせいで優位性がある、不公平であるとされ、彼は当時望んでいたオリンピックへの出場は叶わなかった。もう1つは2021年東京オリンピックの女子重量挙げ87キロ超級に世界初のトランス女性選手として出場したニュージーランドのローレル・ハバードの例である。オリンピック本番前までは、彼女の出場について今回のトーマスと似たような議論が呼び起こされたが、競技終了直後に批判はおさまった。それはハバードが本番で記録なしに終わり、勝利しなかったことと関連があるのだろうか。つまりトーマスは、水泳というとりわけ主要なスポーツにおいて、強く、勝利したがために悪魔化され攻撃されることになったということではないか。そうだとすれば、それは、多様性が尊重される社会にふさわしい態度と言えるのだろうか。

スポーツという文脈の特殊性にも言及しておきたい。速さ、高さ、強さの記録を競うスポーツはその始まりから男性中心の領域のものとされ、歴史的に女性は排除されてきた。かつての女性たちが参加の機会や権利の獲得のために闘ってきて、2024年パリオリンピックは女性の出場選手数が初めて5割になるイベントとなったが、速さ、高さ、強さが重視されるという点ではスポーツにおける記録の主役はどうしても男性となる傾向がある。つまりこれまでの歴史でスポーツにおける女性は、弱く劣ったマイノリティ的存在でいるという性役割の中に構造的に押し込められてきたのだ。そのような構造的問題が存在する中で、トーマスのような強いトランス女性を、女性というマイノリティ集団を強くしてくれる潜在可能性があり共闘すべきマイ

ノリティとして包摂的にみるか、女性というマイノリティ集団が努力して歴史的に獲得してきた権利を奪うマジョリティ男性とみるか、どの視点から語るかによって描写の方向は当然大きく異なってくることになる。またマジョリティである男性の競技にトランス男性が参加してシス男性の記録を破るということは起こりにくいという意味で、トランスの参加の議論は、女性スポーツに特有な課題となっていると言えるだろう。

#### 4.2.3. 「トランス女性は性犯罪者予備軍である」言説

3つ目は、トーマスが生物学的男性の外見を持つため、シス女性選手と更衣室やトイレを共有するのは安全ではないと主張する言説である（以後「犯罪可能性言説」）。

ペンシルベニア大の水泳チームの1人がdailymail.comに今週語ったところによると、そのトランス水泳選手（＝トーマス）は着替えの時にいつも男性器を隠すわけではなく、他の選手たちの懸念は無視されている。（A swim team mate at the University of Pennsylvania told dailymail.com this week that the trans swimmer doesn't always cover up her male genitals when changing, and other competitors' concerns go ignored.）（DM, 5）

「ペン大のチームメイトが語った」とされる内容によると、シス女性である「他の選手たち」はトーマスとの更衣室の共用を「懸念」しているのだが、その懸念の内容は、男性器を持つトーマスに性暴力を受けることであることが読み取れる。ここには、「トランス女性は生物学的男性である」、「トランス女性はシス女性の安全面で脅威である」、「トランス女性はシス女性に対する性犯罪者予備軍である」とするイデオロギーが内包されている。トランス女性の包摂の議論のときに必ず問題として出されるのが犯罪可能性言説である。1人称で匿名で書かれた記事であるDM（21）はその典型的な例であるので、以下に詳細に検討する。

私は生物学的性別を変えることはできないと思う。トイレ、更衣室、病棟、刑務所、家庭内暴力や性暴力の被害者である女性のための施設など、女性がより傷つきやすいとみなされる可能性のある場所では、男女別のスペースを尊重することが不可欠だ。つまり、トランス女性（生物学的男性として生まれ、その圧倒的多数が完全な男性の身体のまま）にアクセスを許可すべきでないと考える。（I believe that you cannot change biological sex and it is imperative that we respect single-sex spaces in areas where women may be considered more vulnerable, such as toilets, changing facilities, hospital wards, prisons and centres for women who are the victims of domestic or sexual violence. That means that I don't believe that trans women (those born biological males, the overwhelming majority of whom remain full male-bodied) should be granted access.）

「トランス女性は生物学的男性である」と主張するために、トランス女性の「圧倒的多数」は男性の身体的属性を完全に残していることに言及される。トイレや更衣室、病棟などは女性が無防備にならざるを得ない場所であり、そこをトランス女性と共有すると女性は「より傷つきやすい」、つまり、性暴力に遭う可能性が増えるとのめかされる。続けて次のように述べられる。

私は断固としてトランス嫌悪ではない。トランスが嫌いでもないし、危害を望んでもいなくて、ただ私は女性と女の子たちの安全を守ることが重要だと考える。また、現在記録を更新しているアメリカ人水泳選手リア・トーマスのような、生まれながらの生物学的男性が女性スポーツで競争するのも認められるべきではないと思う。(I am categorically not transphobic. I don't dislike trans people or wish them any harm, I just think that keeping women and girls safe is important. I also believe that those born biological males – such as the American swimmer Lia Thomas who is currently smashing records – should not be allowed to compete in women's sport.)

トランス女性を性犯罪者予備軍であり、女性の安全を脅かす危険な存在と短絡的にみなすのは偏った見方であるが、書き手本人はトランス嫌悪や差別の自覚はないようだ。ここでは安全を守られるべき「女性や女の子たち」は大人のシス女性やシスの女の子たちのみを指していることは明らかで、トランス女性は女性カテゴリーから完全に排除された他者として扱われている。そして、シス女性の安全を脅かす危険性があるために、トーマスは女子競技に参加すべきではないと主張される。この書き手はさらに、「女性は常に危険な捕食者のリスクにさらされているのであり、それはそもそも男女別のスペースが存在している主な原因である。(Women will always be at risk from dangerous predators and that's a big part of why single-sex spaces exist in the first place.)」と述べる。トランス女性は「危険な捕食者」と描写され、シス女性は男性の身体特徴を保ったままのトランス女性と場所を共有すると、スポーツの文脈だけに限らず、常に性暴力を受ける危険性があるとのめかされる。その裏付けとして、実際に英国で起こった、刑務所でのトランス女性によるレイプ事件について言及される。

このトピックへの私の関心は、カレン・ホワイトのスキャンダルの後に刺激された。ホワイトはトランス女性の囚人（手術をしておらずホルモン療法もしていない未だ無傷の身体の男性）で、女性刑務所に入る道を巧みに切り開き、4人の女性囚人を暴行した。(My interest in this topic was piqued after the Karen White scandal. White was a transgender woman prisoner (still an intact male having had no surgery or hormone treatment), who had manipulated her way into a women's prison and assaulted four of the female prisoners.)

カレン・ホワイトは、出生時は男性で性的暴行を含む前科があったのだが、2017年に事件を起こして刑務所に入るさいに自分は女性であると主張し始めて女子刑務所に収監され、そこで女性受刑者に性的暴行を加えたとされる。当時の英国では、性転換手術の有無に関係なく、本人が主張する性別に基づいて収監されていたために起こった不幸な事件である。性自認が女性であるが男性の身体を保ったままの人が、女性に性的暴行を加えたとすれば、それ自体は大変深刻な問題であり、男女別の安全なスペースが尊重されるべきとの主張は、大いに説得力を持つ。しかし、このような極端な事例をもって、女性を自認しかつ男性身体の属性を保ったままの人は全員が「危険な捕食者」で潜在的な性犯罪者であると主張するのは飛躍のしすぎであろう。

このように犯罪可能性言説は、トランス女性のトーマスは生物学的男性であるため性犯罪者予備軍であり、シス女性選手にとっては更衣室等の共有が安全面で脅威となるので、大会に出場させるべきでないと主張する。トランス女性とシス女性のスペース共有については、生物学や医学だけでなく、実際のところ政治や文化の問題ともなり得て、広い視野で冷静で慎重な議論が必要であるのは間違いないだろう。しかしトランス女性全員を一つにまとめて性犯罪者予備軍で危険とみなすような論理は、トランス差別に該当するであろうし、トーマスの人格や名誉や尊厳を傷つけるものであり公正なものではない。さらにこの言説の問題は、トーマスの選手権出場と更衣室使用の問題は直接の関連がないことであり、トランス女性は女子更衣室を使用すべきでないから女性として選手権に出場させるべきではないという論理展開は説得力を持たない。

#### 4.2.4. 「スポーツにおける性自認尊重は問題である」言説

4つ目は、近年の性自認尊重の動きは、スポーツの文脈においては正しくないと主張する言説である（以後「反＝性自認尊重言説」）。この言説には「トランス女性は生物学的男性である」というイデオロギートともに「スポーツでは性自認よりも生物学が優先されるべきである」、「スポーツにおけるトランス女性の性自認尊重はシス女性差別である」とするイデオロギーが内包されていると考えられる。あわせてこの言説のいくつかでは、そのような意見を表明すると直ちにトランス嫌悪とみなされ批判される空気、性自認尊重に対し異論を差し挟むことがタブー化している社会状況があると主張され、それに対する不満が述べられる。

今日もっとも流行していて意見の分かれる大義のルールによると、トーマスは「移行期の男性」ではなく、本格的な女性である。(According to the rules of the most fashionable and divisive cause of the day, though, Thomas is a fully fledged woman, not a ‘transitioned man’.) (DM, 25)

人は出生時の性にかかわらず性自認に基づいて性別を決定できるとする性の多様性尊重の流れ

は昨今の主流となったが、上記言説は、その性自認尊重の動きは「流行」であり、意見が分かれる、つまり潜在的に反対している人も多いとほのめかす。トーマスが身体は生まれついた男性のままでありながら女性と認められる現状に疑義を呈し、「性自認にかかわらずトーマスは生物学的男性である」と主張する意図が見られる。

昨年夏の東京オリンピックで、IOC（国際オリンピック委員会）医学ディレクターの Richard Budgett 博士は次のように宣言した。「トランス女性は女性だということに誰もが同意しています。」しかし、非常に多くの女性選手は、そのようなことを何も受け入れていない。（At last summer's Tokyo Games, Dr. Richard Budgett, medical director of the International Olympic Committee, proclaimed: "Everybody agrees that trans women are women." A great many female athletes, however, accept nothing of the kind.）（DT, 22）

DT（22）は、トランス女性は女性であるという前提のもと IOC などのスポーツ管理団体が性自認に基づいてトランス女性を女性カテゴリーで競技させることについて、「大多数の」シス女性選手たちは全く納得していないとの推論を述べる。トーマスが優勝した競技で17位となり16位までが出場できる決勝への進出を逃した Reka Gyorgy 選手による、「それは私たちのスポーツを良い意味で宣伝するものではなく、競争している生物学的女性の水泳選手に対して失礼だと思います。（"It doesn't promote our sport in a good way, and I think it is disrespectful against the biologically female swimmers who are competing."）（DT, 22）」というコメントもその根拠として引用し、スポーツにおいてトランス女性の性自認を尊重することは、賞を競り合うシス女性選手に対する「敬意を欠く」行為、つまり女性差別であるとのほめかす。

一方、「トランス女性は女性だということに誰もが同意している」という IOC 当局の断定的コメントに象徴されるように、トランス女性の性自認尊重が政治的に正しい見方とされ、異議を唱えることが難しい社会状況があると主張する記事もある。例えば以下のようなものである。

大学、評議会、政府の特殊法人など、分別があるべき多くの機関は、トランス嫌悪になることを非常に恐れ、最も基本的な生物学的事実を公然と否定する。（Many institutions which should know better – universities, councils, quangos – are so terrified of being transphobic that they will openly deny the most basic biological facts.）（DT, 23a）

上記は、トランス女性は生物学的には男性であるという見方は「生物学的事実」であり、それは「最も基本的」なこと、つまり常識であるとのほめかす。しかしトランス嫌悪の誹りを免れようと、その常識や分別を「多くの機関」が共有しようとしないう状況があるとする。他の記事も、スポーツ管理団体の間では、「トランス嫌悪というレッテルを貼られることへの恐怖が、女性

のスポーツを守る意思よりも優先されている (the terror of being labelled transphobic overrides any inclination to protect women's sport) (DT, 22)」と述べる。トランスに厳しい出場規制をかけている World Athletics (世界陸連) だけは、会長のセバスチャン・コーが、「ジェンダーは生物学に勝るものではない。 ("Gender cannot trump biology.") (DT, 22)」とスポーツにおける性自認尊重に反対する発言をしたと報道されるが、それを除くと、

しかし他の場所では、沈黙の陰謀が進行中であり、トランスジェンダーのアスリートが女性と競技する資格についての最も穏やかな批判でさえ、公の非難を恐れて差し控えられている。(But elsewhere a conspiracy of silence is afoot, where even the mildest critiques of transgender athletes' eligibility to compete alongside women are withheld for fear of public denunciation.) (DT, 22)

と述べられる。これらの言説は、スポーツ管理団体の多くは、公的にはトランス女性の性自認尊重に同意しているが、それは多様性尊重や包摂という政治的正しさの積極的実践というより、トランス嫌悪と非難される恐れから「沈黙」という消極的承認をしている可能性があるとのめかしているようだ。そしてその「沈黙」は、シス女性選手にとっては女性の権利を侵害し女性スポーツを壊す女性差別的な「陰謀」に他ならないと主張される。それでも、「エリート NCAA 大学水泳選手とその両親たちはトランスジェンダーイデオロギー信奉者にひどく怯えているため、あえて公然と異議を唱えることはない。(So cowed by transgender ideologues are the collegiate swimmers of the elite NCAA and their parents, that they dare not openly contest the situation.) (DM, 26a)」と述べられ、言論が委縮し反対意見の表明が抑圧されている状況があると指摘する。

また反=性自認尊重言説では、トランス女性の性自認尊重に疑問を呈すことで、社会的制裁を受けるような空気が醸成されていると主張される。その根拠として、実際に英国で著名人等がトランス女性の性自認尊重について批判的なコメントをし、非難された例を挙げる。例えば、ハリー・ポッターシリーズの作者 J.K. ローリングは、「女性の性に基づく権利は守られるべきだという信念を発言するたびにトランスの活動家から死の脅迫を受けたりオンラインで住所をさらされる ([W]henver J.K.Rowling articulates her conviction that women's sex-based rights should be defended, she receives death threats or has her address published online by trans activists . . .) (DT, 22)」ようなことがあったとされる。また元テニス選手のマルチナ・ナブラチロワは、「スポーツの女性カテゴリーの完全性を守るために (so that the integrity of the female category can be defended) (DT, 22)」トーマスはオープンカテゴリーで戦うべきと提案したことで、「彼女の「不愉快で不穏で深くトランス嫌悪的な」考えのために LGBTQ の擁護団体 Athlete Ally のアンバサダーを外された (dropped by LGBTQ advocacy group Athlete Ally as an ambassador for her

“disturbing, upsetting and deeply transphobic” views) (DT, 22)」と述べられる。彼女たちのようにトランス女性の性自認尊重に批判的な意見を述べると、政治的に正しくない表現をしたと捉えられ、TERF（トランス排除フェミニスト）であるとして強い抗議を受ける社会的空気があることが主張される。このような抗議はいわゆる「キャンセルカルチャー」の例と言えるだろうが、そのやり方の是非は今はおき、反＝性自認尊重言説において注目すべきことは、トランスを擁護しキャンセルを実践する側の人は「トランス活動家」や「トランスジェンダーイデオロギー信奉者」、「トランスロビー」などと言及され、極端で暴力的な行動をする人々として描かれることである。前節で言及した記事の作者が実名ではなく匿名で犯罪可能性言説の記事を書いているのもトランス嫌悪の非難を避け、身の安全を守るためと推測できるが、別の見方をすればそうすることでトランス擁護側の人々は実名で自由に意見を表明することを躊躇させるような空気を作っている過激で怖い人々だと読者に印象付けてもいる。スポーツにおける性自認尊重の是非の議論が怖くてできない空気を強引に作り上げている人々としてトランス擁護者を描くことは、結果的にトランス当事者のイメージを悪くすることにつながると思われる。

米国での例としては、ペン大の水泳選手の両親が匿名で大学とアイビーリーグにトーマスの競技出場についての抗議の手紙を送ったのだが、当局からの返信はシス女性選手の両親の異議に共感を寄せるものではなく、「そのような時代に逆行する考えを持つ人は誰でもカウンセリングが利用可能です (counselling was available for anyone who held such retrograde views) (DT, 23a)」と述べるものだったとの報道がなされる。この報道も、トランス女性の性自認尊重に異議を唱えることは、スポーツの文脈においても「時代に逆行」した政治的に正しくない意見として抑圧され、トランス嫌悪の罪で指弾されるという空気があるということをほのめかしているようだ。つまり反＝性自認尊重言説は、スポーツにおける性自認尊重に反対するのと同時に、性自認尊重を是として反論を許さない社会の空気があるとしてそれに疑義を呈している。

多くの女性は、ジェンダーアイデンティティのイデオロギーの特定の側面が女性の基本的権利に難題を突き付けることを懸念しているが、もし声をあげるとトランス嫌悪として汚名を着せられるのではないかと恐れている。(Many women are concerned that certain aspects of gender identity ideology pose challenges to their fundamental rights, but fear that if they raise their voices they will be stigmatised as transphobic.) (DM, 5)

不変の生物学のため、トーマスは女子水泳競技には程遠いはずだ、という多くの人が賛同する意見でさえ、異端と同等のこととして描かれうる。([E]ven a perspective on which many agree – that Thomas should, for reasons of immutable biology, be nowhere near a women’s swimming race – can be depicted as tantamount to heresy.) (DT, 22)

DM (5) は、トランス女性の性自認尊重の空気を「イデオロギー」とみなし、シス女性の「基本的権利」を侵害するものと捉えている。また、DT (22) では、トーマスは生物学的男性のため女子競技に出るべきでないという意見は「多くの人が賛同する」常識であるとの見方が語られるが、トランスの性自認尊重が正統とされる現状ではそれはトランス嫌悪という「異端」の意見であるとみなされる可能性があることが示唆される。「異端」という宗教を想起させる語が使われているが、実際に包摂を「新しい宗教」と呼んだ次のような記事もある。

新しい宗教に洗脳されたこの町には、包摂性の祭壇で喜んで礼拝する若い女性がたくさんいる。(Brainwashed by a new religion, you'll find plenty of young women happy to worship at the altar of inclusivity.) (DM, 26b)

これらの反＝性自認尊重言説は、性自認尊重の理念が、正しさを体現するある種宗教的な立ち位置、あるいは異議を挟めない主流のイデオロギーになっているとみなされるような空気があると述べ、それは問題だと主張しているようだ。

シス女性の権利や女性スポーツを守るためにスポーツにおけるトランス女性の性自認尊重に反対であると主張することは、シス女性とトランス女性を分断し、トランス女性の困難を不可視にし、トランス女性の差別や排除を維持してしまうことになる。トランスの人権は守られるべきであることは当然で、トランス差別は許されないが、もしトランスの競技参加についての様々な意見を表明すると命の危機にさらされるような極端に委縮した空気が報道当時にあったとすれば、より望ましい包摂の可能性に向けた率直な議論ができず健全な状況ではなかったのかもしれない。万一当時のスポーツ界が、「本音では性自認尊重に反対だが非難が怖いので認めておく」という態度で議論をタブー化したとすれば、結局はトランス当事者のイメージ悪化につながってしまうであろうし、何かのきっかけで揺り戻しがあることは十分にありうるだろう。実際に、メディアによって流布された一連の反対・非難言説によるトーマスへの批判的な注目が大きな要因の1つとなったのであろうが、前述したように水泳界ではこのあと性自認尊重の流れからの大きな揺り戻しが起こり、一転してエリート女子大会へのトランス女性の参加を制限する新指針が定められた。その他の多くのスポーツ競技でもトランス女性のエリート大会出場について厳しい制約が設けられていき、その結果として2024年パリオリンピックではほとんどのトランス女性は女子競技への出場資格を持たなかったとされる。現在のこのトランス女性排除の状況は望ましい着地点とは考えにくい。今後の科学的根拠の蓄積等によりこの状況は改めて問われ、再度の揺り戻しもありうると想定されるが、対処の舵取りは容易ではないことが推測される。

## 5. 結論とまとめ

トーマスの選手権出場や優勝に反対し非難する論調の新聞記事の言説構造を批判的に分析し、トランス女性であるトーマスがどのような排除や差別や悪魔化の語りにさらされているかを見てきた。分析から得られた知見をまとめると、反対・非難言説のパターンには、1、「生物学的優位性」言説、2、「不公平性」言説、3、「犯罪可能性」言説、4、「反＝性自認尊重」言説の4種類が確認され、これらの言説が1つあるいは複数組み合わせられて反対・非難言説を形成していた。各言説に内包されたイデオロギーとして、1は、「トランス女性は生物学的男性である」、「スポーツにおいてトランス女性はシス女性に対して生物学的優位性を持つ」というもの、2は、「トランス女性は生物学的男性である」、「トランス女性の参加はシス女性にとって不公平である」、「トランス女性がシス女性の出場やメダル獲得の機会や権利を奪うのは女性差別である」、「公平性は包摂よりも重要である」というもの、3は、「トランス女性は生物学的男性である」、「トランス女性はシス女性の安全面で脅威である」、「トランス女性はシス女性に対する性犯罪者予備軍である」というもの、4は、「トランス女性は生物学的男性である」、「スポーツでは性自認よりも生物学が優先されるべきである」、「スポーツにおけるトランス女性の性自認尊重はシス女性差別である」というものが抽出できると考えられた。

「トランス女性は生物学的男性である」という本質的にトランス嫌悪的なイデオロギーが言説全体を貫く軸として存在し、反対・非難言説はあくまでトーマスは男性だと主張する視点に立っていることが指摘できる。同様に言説全体を貫くものとしてシス女性中心主義イデオロギーも挙げられる。反対・非難言説ではトーマスの選手権参加や優勝は、あくまでシス女性を中心・規範とした視点から、不公平、女性差別、脅威であるなどの語りが展開され、トーマスが悪魔化されていた。

本稿で扱ったのはSNS等の言説ではなく、新聞記事におけるトランス女性をめぐる表象である。考察対象にしたのは右派の論調の新聞や高級紙でない新聞を含むが、社会で一定の権威をもち、過激な言論はある程度抑えられていると考えられる新聞がトランス差別や排除を再生産する可能性がある視点の語りを展開していることは注目すべきだろう。

性自認が尊重される世界的な流れの中で、今後スポーツ競技に参加を希望するトランス女性は増えると想定される。しかし多様性と包摂という理想のために、われわれは「トランス女性は女性である」と主張していけばいいと言えるほど問題は単純ではないようにも思われる。この主張にはトランス女性はシス女性とは異なるものであるとの含意が既にあることは否定できないし（清水、2021）、この主張を反論してはいけないものとして扱い議論をタブー化することは、結果的にトランス女性のイメージを悪くさせる可能性や、トランス女性にとって差別的な現状をこのままにとどめおいてしまう可能性があるのではないだろうか。この問題への対処の難しさは、多くの論者<sup>7</sup>が指摘するように、スポーツにおける「男」「女」という性別の名称を冠したカテゴリー、つまりトランスの存在を想定しない、かつシスジェンダー男性身体優位

の性別二元論、の限界が見えてきているということを物語っているのであろう。また井谷(2021b)が指摘するように、金メダル以外は意味がないとするゼロサムゲームの価値観に基づいたエリートスポーツの勝利至上主義も状況を複雑にしている一因であろうと思われる。スポーツにおけるトランス包摂の議論については、シス女性中心の視点だけではなく、差別や偏見にさらされているトランス女性の困難にも寄り添いながら建設的で包括的な議論を重ねて、社会的に望ましい着地点を時間をかけて探っていくしかないのだろう。

## 注

1. 2023年1月以後は、名称をWA（世界水泳連盟）に変更。
2. FINA (2022), “Policy on Eligibility for the Men’s and Women’s Competition Categories”, <https://resources.fina.org/fina/document/2022/06/19/525de003-51f4-47d3-8d5a-716dac5f77c7/FINA-INCLUSION-POLICY-AND-APPENDICES-FINAL-.pdf> (2025.1.5. 最終検索)。
3. CDS（批判的言説研究）とも呼ばれる。
4. 例えば、名嶋（2018）、Richardson et al. (eds.)（2011）などを参照。
5. 例えば、ショーン・フェイ（2022）『トランスジェンダー問題』（明石書店）では、英国における激しいトランス差別の現状が詳述されている。
6. 井谷（2021a）は、スポーツ界がナノレベルのホルモン値で女性の定義をすることについて、科学原理主義的ジェンダー規範であり、暴力的であるとして批判している。
7. 例えば、來田（2023）、岡田他（2022）、井谷（2021b）などを参照。

## 引用記事一覧

- Daily Mail, “From Trans Celebrity Caitlyn Jenner, AR, Refreshing Dose of Common Sense”, Mar. 5, 2022, by McMahon, Barbara.
- Daily Mail, “How I Joined Feminism’s Undercover Fightback — Armed Only With Stickers”, Mar. 21, 2022, by York, Grace.
- Daily Mail, “No Matter Your View, You Can’t Deny the Fact of a Male Body”, Mar. 25, 2022, by Power, Brenda.
- Daily Mail, “Portrait of a Sports World Gone Mad”, Mar. 26a, 2022, by McMahon, Barbara.
- Daily Mail, “Silence Not an Option in Transgender Debate”, Mar. 26b, 2022, by McGowan, Stephen.
- The Daily Telegraph, “After This, Trans Swimmer Lia Thomas Must Never Compete at the Olympics”, Mar. 23a, 2022.
- The Daily Telegraph, “Fairness or Inclusion Is the Reality, Not Both”, Mar. 23b, 2022.
- The Daily Telegraph, “Fear of Transphobic Label Halts Protection of Women’s Sport: Crushing Any Debate Over Transgender Swimmer Lia Thomas’ Biological Advantage Is Perverse and Crudely Warped”, Mar. 22, 2022.
- The Daily Telegraph, “Trans Swimmer’s US Victory Is Bittersweet: Fellow Medallists Register Their Protest on Podium After Lia Thomas’s Historic Elite Women’s Event Win”, Mar. 19, 2022.
- The Daily Telegraph, “We Seem to Have Lost Track of What Sport Is All About: Fairness”, Mar. 18, 2022.
- USA Today, “Penn Swimmer Lia Thomas Becomes First Trans Woman to Win NCAA Swimming Championship”, Mar. 18, 2022, by Gilbert, Asha, C.

The Washington Post, “A Swimmer Swamped by the Fears of Others”, Mar. 17, 2022, by Jenkins, Sally.

The Washington Post, “It’s Not Protecting Women”, Mar. 2, 2022.

The Washington Post, “Thomas Leaves Questions in Wake as College Career Ends”, Mar. 21, 2022, by Carpenter, Les.

The Washington Post, “Thomas Makes History in the Pool”, Mar. 18, 2022, by Carpenter, Les.

## 引用文献

朝日新聞デジタル（2016年1月14日公開）

「「チャレンジド」02 五輪に出たい 第1回 “跳びすぎた” 男」、<http://www.asahi.com/special/challenged/athletics/markusrehm/01.html?fromL1>（2025.1.6. 最終検索）。

朝日新聞デジタル（2016年1月20日公開）

「「チャレンジド」02 五輪に出たい 第2回 「義足男」になった気分」、<http://www.asahi.com/special/challenged/athletics/markusrehm/02.html?msocid=05e4e63d2a9c661b3f09e9bb2b6e6718#panorama>（2025.1.6. 最終検索）。

阿部ひで子（2023）「言語行為とジェンダー再構築—トランスジェンダーの場合—」『社会言語科学』、第26巻第1号、pp. 21-36。

井谷聡子（2021a）「オリンピック問題からジェンダーを考える」、『シモース』、Vol.4、pp. 100-105、東京：現代書館。

井谷聡子（2021b）「東京2020とトランス選手と」、『エトセトラ』、Vol.6、pp. 80-82、東京：エトセトラブックス。

岡田桂・山口理恵子・稲葉佳奈子（2022）『スポーツとLGBTQ + シスジェンダー男性優位文化の周縁』、京都：晃洋書房。

來田享子（2023年6月27日公開）「スポーツとトランスジェンダー —排除の語りを見抜き、21世紀型のスポーツを展望するために—」、Women’s Action Network、<https://wan.or.jp/article/show/10695>（2025.1.6. 最終検索）。

清水晶子（2021）「「同じ女性」ではないことの希望—フェミニズムとインターセクショナリティ」、岩渕功一（編著）『多様性との対話—ダイバーシティ推進が見えなくするもの』、pp. 145-164、東京：青弓社。

名嶋義直（2018）『批判的談話研究をはじめの』、東京：ひつじ書房。

Richardson, John, E. and Joseph D. Burridge (eds.) (2011) *Analysing Media Discourses*, New York: Routledge.

Sports Illustrated (released Mar. 3, 2022) “‘I am Lia’: The Trans Swimmer Dividing America Tells Her Story”, by Robert Sanchez, <https://www.si.com/college/2022/03/03/lia-thomas-penn-swimmer-transgender-woman-daily-cover> (2024.12.29. 最終検索)。

